

# 植 菌

能村 研三

さくらの句

先師登四郎の随筆集『鴉の手帖』の中の「さくらの句」に次のような一節がある。

「さくらの句は、若い時は殆ど詠んでいない。たまに詠んでも『花冷』『奈花』『さくら薬降る』という風に、わざと華やかさを避けたものが多い。」

しかし、全国にある登四郎の十七基の句碑の中に桜を詠んだ句が四基もある。

ひらく書の第一課さくら濃かりけり

市川学園グラウンド三師句碑

睦み合ふごとし雨中の松さくら

岡崎市 大樹寺境内

早池峯の雪がよへり朝ざくら

花巻市 自性院境内

靈地にて天降るしだれざくらかな

東吉野村 實蔵寺境内

「ひらく書」の句碑以外は、登四郎の生前に建立されたもので、句碑の建立には自分自身も立ち会っている。

私が俳句を始めた頃、登四郎から初心時代に「雪月花」を詠むのは難

末黒野に会ふ別々の道を来て  
きさらぎの波かぶりをる艇庫かな  
春遠し山へ轍のいく筋も  
涅槃寺よごれ乾きの靴並ぶ  
狷銃音山崇高となる一瞬  
春の宿振り子時計に寄贈の名  
今日立春直行直帰してゐたり  
表裏分からぬままに海鼠突く  
余寒なほ鬼門封じの真つ赤な実  
植菌の櫓組まれたる朧かな

しいと言われたことがある。

これは日本人の心の奥深くに「雪月花」の美意識が、人恋しさの思いを纏いながら息づいていて、俳句の世界でも、これほど親しまれた主題はなく作句例も多く、新機軸を打ち出そうとしても、蟻の這い出す隙間もないほど、名作が葬っているからだろう。

「花」の代表格の「桜」もその例外ではなく、初花のういういしさ、咲き満ちた華やき、散る花への移ろいなどなど。まして満開の桜などの華麗なるが故に却って詠みにくいものである。

先師登四郎も随筆を書いた頃は「桜」を詠みこなすには何十年という歳月がかかるものだということを知識していたのだろう。

今年の桜の開花は例年より早そう。三月末に鴉亭近くの真間川の桜並木を沖の皆さんと吟行してみようと思う。

能村 研三